

第5回ファザー・オブ・ザ・イヤーinみえ

大賞

(敬称略)

部門	氏名	住所	推薦者	育児対象	概要
みんなの子育て エピソード部門	田中 信之介	津市	本人	子 (7歳、10歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・平日の夕食は一緒に食事をする事ができないため、家族みんなで過ごす時間を大切にしたいと考え、「食育」の一環として「共食」と「旬の野菜を食べる」ことに取り組む。 ・「共食」は、朝食は必ず家族と一緒に食べることを実践。学校の話などコミュニケーションをとる。 ・「旬の野菜を食べる」は、家庭菜園でたくさんの野菜を育て、子どもとは畝づくりから植えつけ、水やり、草取り、収穫まで一緒にやりながら、育てる大変さ、収穫の楽しさ、自分で育てた旬の野菜を食べる喜びなどを伝える。 ・週末の朝食などは積極的に作る。
	橋口 誠	鈴鹿市	橋口 千恵子 (妻)	子 (1歳、10歳、12歳、14歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・先天性心疾患と重度の脳性麻痺があり、医療的ケアが必要な息子(1歳)の痰吸引や栄養の注入、リハビリも積極的に協力。 ・夜もケアでなかなか眠れないが、翌日仕事があるにも関わらず、交代してお世話をする。 ・息子は苦手なお風呂もパパとなら泣かずに入れるようになった。 ・妻も夫と一緒に頑張ってくれるから、笑顔で息子に接することができる。
	森田 竜也	松阪市	森田 幸恵 (妻)	子 (0歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・子育ては「母親1人が頑張るのではなく2人です」ということを大事にしている。仕事の休みが少ない中でも、は率先して子どもの世話や遊ぶ。 ・夫婦が互いのことを尊重し合う姿を見せて育てたいという思いから、いつも「ありがとう」の言葉とともに「お母さんはすごいよ」と娘に声をかける。 ・娘と関わりを通して、妻が自身のメンタルサポートが一番助かっていると感じる。

部門賞

部門	氏名	住所	推薦者	育児対象	概要
みんなの子育て エピソード部門	小林 幸司	玉城町	小林 樹稀 (子)	子 (5歳、8歳、10歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもからパパへのメッセージ 「パパいつもサッカーをおしえてくれてありがとう。また野球も教えてね。いつもありがとう、大すきだよ。でもたくさんおこらないでね。そしてごはんもうどん、やきそば、チャーハン、おこのみやきとか、ずっとあきないしおいしいよ。いつもありがとう。」
	濱口 恵太	松阪市	濱口 江莉香 (妻)	子 (1歳、3歳、5歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・趣味のギターを弾きながら子どもたちと歌う。たまにイベントなどでも披露。 ・食器洗いはほとんどする。 ・仕事が早く終わると、子ども3人を連れて散歩に行ったり、外で遊んだりする。

部門賞

部門	氏名	住所	推薦者	育児対象	概要
わが社のイクボス部門	岡野 直高 (中部電力(株) 電力ネットワーク カンパニー津営業所)	津市	杉本 隆美 (部下)		<ul style="list-style-type: none"> ・効率よく仕事をするため、優先順位を考えムダなく仕事を進める工夫をする。職場懇談会ではスイーツの差し入れをするなど、風通しの良い職場づくりを常に考える。 ・チームのメンバーの相談にも親身になって乗る。 ・昨年、部下の前で「イクボス宣言」をし、宣言どおり「有言実行」。部下一人ひとりとしっかり向き合い、コミュニケーションをとる。 ・子ども3人育て、家族を大切にしていることを、職場でもオープンにしているので、部下も自然と家族の話をする。
	岡田 光生 (岡田パッケージ (株))	松阪市	村林 千夏 (部下)		<ul style="list-style-type: none"> ・会社では、育児休業復帰後の短時間勤務制度や、子どもの急な熱などの時に看護休暇を1時間単位の有給で利用できる。 ・次世代育成支援金として、出生時から高校卒業までの節目で6回、合計約50万円のお祝いをもたらえる制度がある。 ・ファミリーデーや花見など家族を招待するイベントを実施。従業員同士の家庭環境を知ってもらう機会になっている。

グッドエピソード賞

部門	氏名	住所	推薦者	育児対象	概要
みんなの子育てエピソード部門	岸田 諭祀	四日市市	本人 と 岸田 識暉 (子)	子 (9歳、11歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもからパパへ「うちのパパはお家でせんたくものをしています。あと、とってもしょうりがじょうずです。」 ・夫婦フルタイム共働きなので、1人が早朝出勤して仕事を片付け、もう1人が残業するなど、勤務が重ならないようにしながら実務をこなす。洗濯もの干しの際など、子どもたちと一緒にして、触れ合う時間をつくる。 ・料理を一緒にしたがる子どもに、包丁の使い方や火加減など、楽しく、時にはしっかりと伝えながら、危ないからさせない、時間かかるからさせないではなく、やりたい気持ちを大切にしている。
	伊藤 晋也	東員町	伊藤 和 (妻)	子 (3歳、5歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・夫婦共働きで時間に余裕がないなか、家事をできるだけ減らすため、 <ol style="list-style-type: none"> (1)洗濯物は夜干して朝畳む (2)保育園の準備は、帰ってきたら直ぐにする (3)朝ごはんはなるべく定番化し、作るのに時間をかけない に取り組む。 ・できるうちにすぐやるを基本として、笑顔でいるため、もっと楽に家事をしよう！省けるだけ省こう！と考えた結果が今の形。 ・毎朝起きると、洗濯物を畳み、子どもの着替えを手伝い、トイレトレーニング中の息子にも、「上手にできたね！」と声をかけながら、毎朝保育園まで送り届ける。妻が忙しい時は、お迎えから食事、お風呂へ入れて寝かしつけまでこなす。

グッドエピソード賞

部門	氏名	住所	推薦者	育児対象	概要
みんなの子育てエピソード部門	青柳 尚	鈴鹿市	青柳 智絵 (妻)	子 (5歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・単身赴任で、家にいる土・日曜日の朝食を娘と一緒に作る。 ・娘と2人だけで図書館へ行ったり、プールへ行ったりして、妻が1人でゆっくり過ごせる時間を作る。 ・「子どもがやりたい！」と言うことを大切に。土日は子どもと一対一でゆっくり遊ぶ。
	藤野 聖人	名張市	本人	子 (2歳、4歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・がんばっている家事は食器洗い、風呂掃除、掃除機など。気が向いた時にパパッとやる。 ・趣味の空手に、子どもを連れて行くほか、2人の子どもをウェイト代わりに持ち上げたり、スクワットしたりする。
	水谷 共志	大紀町	水谷 美紀 (妻)	子 (0歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事が休みの日、子どもは自分が見て、妻に気晴らしに買い物とか好きなことしておいでと言って出掛けさせる。 ・妻が体調不良で、子どもを連れていきかけたイベントを諦めようとしていたとき、子どもを連れて行き、2人で楽しんだことがあった。 ・普段から時間があるときは子どもとたくさん関わり、家事も行う。
	長谷川 真	鈴鹿市	杉本 正直 (会社の先輩)	子 (1歳、4歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・2人目が産まれて、育児の方針を変換。これまでは共働きの妻ができていなかった料理や掃除などを手伝うという「マイナス」から「ゼロ」の子育てだったが、「ゼロ」を「プラス」にすることをめざすことに。 ・ミシンの使い方を母親から教わり、子どもたちには浴衣、自分たち夫婦にはアロハシャツを作る。同じ柄の服を着て、みんなでお出掛けすることに家族の絆を感じる。
	坂口 文昭(※1)	津市	本人	子 (5歳、10歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・単身赴任で子どもとの触れ合いが少ないため、毎日子どもが習っている空手の練習状況(組手、形)の動画をチェックし、子どもに電話でアドバイスするほか、その日の出来事を話す時間を設ける。 ・月2回、東京の家に帰り、プール、サッカー等を子どもと一緒に楽しむ。
	吉岡(※2)	松阪市	吉岡 友香理 (妻)	子 (4歳、4歳、8歳、10歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・BBQが趣味で、休みの日には家族一緒に食材の買い物をし、夕食をつくる。 ・県外に食材の買い物に行く日は、普段は行けない公園を探し、公園→買い物のコースで子どもが喜ぶ時間をつくりつつ、夕方からは自分の趣味の肉の買い物へと休日をぎゅっと凝縮して過ごす。BBQでは子どもたちの大好きなマシュマロを焼いたり、家族一人一人が楽しめるように配慮。 ・妻も夫への感謝を子どもたちに伝えているため、子どもたちはパパが大好きで尊敬している。
	高林 紘	松阪市	高林 菜々美 (妻)	子 (1歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事が忙しいが、出勤前の5分を大切にし、娘をいっぱい抱きしめ、いっぱい話しかけ、いっぱい頬擦りして、朝から家族みんなが幸せパワーを充電。 ・海外旅行が好きで、娘に海外のカラフルで綺麗な絵本を読む。 ・家事をする時間がないが、毎日妻に「いつもありがとう」「今日のご飯も最高！」など、感謝や思いやりの言葉をかける。その言葉が妻のモチベーションをあげ、楽しくテキパキと家事ができて時短に繋がる。
	横井 一人	津市	本人	子 (1歳、3歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・共働きのため、子育てや家事などをシェア。 ・仕事を終えて家に帰ると子どもたちはすでに寝ていることが多いため、仕事前の早朝、近所の公園で遊ぶ。 ・勤務先の勧めもあり、育児関連休暇や育児休業を取得して、主夫業にトライ。そのとき苦労した体験から、結構な割合でお弁当を作るなどしている。

グッドエピソード賞

部門	氏名	住所	推薦者	育児対象	概要
みんなの子育てエピソード部門	櫻井 幸一	津市	櫻井しのぶ (妻)	子 (0歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・機嫌が良い時に見る、おむつを換える、抱っこする、で満足ではなく、夜中に授乳を妻がすることになるので、朝は早起きして弁当をつめ、洗濯物を干し、前日の洗い物の食器をしまい、ゴミをまとめて捨ててから出勤、帰宅後は抱っこにミルクに、おむつ換えをする。 ・食事の時間に子どもがぐずれば、日中ゆっくり食べることのできない妻が食べることを優先して、子どもをあやす。
	大井 賢	津市	本人	子 (6歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・子育ての理念は「家庭教育はすべての教育の基礎」。 ・夫婦「同じ立場」が夫婦間での合い言葉で、夫婦のうちその時できるものが、家事・育児を行っている。ただ、それぞれ得意・苦手なこともあるので、話し合っって弾力的に役割を決めている。 ・子どもは小学生になって手伝いもできるようになってきたので、今では家族全員で日々の生活を協力している。
わが社のイクボス部門	坂口 文昭(※1) (株)日本政策金融公庫 津支店)	津市	倉田 夏実 (部下)		<ul style="list-style-type: none"> ・会社では部下のワークを支えることはもちろん、部下の子どもや奥さんの体調、行事に応じ、休暇取得を推進。 ・誰かが急きょ休んでも良いように、各担当者が今どのような仕事をしているか、表を作成して共有している。 ・月に2～3度は自宅のある東京に帰り、家族サービスを忘れない。
	秋山 宏 (株)日本政策金融公庫 津支店)	津市	中田 順哉 (部下)		<ul style="list-style-type: none"> ・部下が家庭の事情で仕事を休まなければならなくなった時などには、いつも快く応じる。誰かが休暇で不在の時は自ら率先して仕事の穴埋めをするので、部下は休暇をとりやすいと環境で働いていると実感。 ・毎週金曜日のノー残業デーには、部下に早く帰るように促し、実際にいつもより早く帰宅できている。 ・週末には東京で暮らす家族のところへ三重から毎週帰っている。
	中川 幸子 同じ部署のメンバー (株)津松菱)	津市	本人、伊藤 麻理(部下)、鍋田 良恵(部下)		<p>【中川さんコメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担当売場には、子どもがいる従業員もいるので、売場を円滑にまわすため、子どもの行事予定などを確認してシフト組みをするとともに、その他のスタッフも土日曜日等に休みが取れるよう配慮している。 ・急に子どもが体調を崩すなどして何日もスタッフが休まないといけない時もありますが、担当売場以外のスタッフに助けをもらったり、シフト変更を行ったりして、全員で協力している。「困った時はお互い様」の声かけにより、よい職場の雰囲気づくりを意識している。 <p>【伊藤さんコメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもができたとき、すぐに上司から育休を勧める声をかけてもらい、育休を1年間取得。育休明けは子どもの病気などで出勤しない日が多い月もあったが、上司があたたかい言葉を掛けてくれ、仕事も上司や同僚がフォロー。子どもが大きくなってあまり休むことがなくなってきた今、これまで迷惑をかけた分、仕事はいつもプラスαで頑張ろう！と思っている。 <p>【鍋田さんコメント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会社には子どもが小学3年生を終了するまで時短勤務と、小学生になるまで子どもの看護休暇を年5回もらえる制度がある。 ・これまでに3年間の産休育休を取り、仕事復帰後、時短勤務で働く。突然の子どもの病気や学校・保育園の行事などでも、シフトを配慮してくれ、上司、スタッフのみんなに支えてもらい同じ職場で働けることに感謝してる。
	榊 和行 (住友電装(株)津製作所)	津市	本人		<ul style="list-style-type: none"> ・自職場では体調不良による欠員が出てギリギリの人員で操業していて、他職場も急な高受注による繁忙状況に入っていたとき、部下から育児休暇取得の相談を受けたが、同僚と相談のうえ取得を勧めた。 ・同僚とは日常のコミュニケーションによる相互信頼、相互理解があったからこそ、迅速に対応ができたのではと考えている。 ・会社では経営側や上司たちが、積極的な声掛けを行い、育児休暇や有給休暇が取得しやすい風土づくりを進めている。

※1 坂口文昭さんは「みんなの子育てエピソード部門」と「わが社のイクボス部門」の2部門でグッドエピソード賞を受賞

※2 吉岡さんは本人の希望により、苗字のみの表記